中島敦「光と風と夢」について
――物語りの構成を中心に――

肖　航

要　旨

作品《光与风与梦》以传记性说明和日记交错的形式描写了代表作为《金银岛》和《化身博士》的作家罗伯特・路易斯・斯蒂文森晚年在萨摩亚群岛的生活。作者中岛敦在创作这部作品时主要以斯蒂文森的书信集 *Vailima Letters* 等为参考资料，在创作时有意地对其内容进行了筛选、删除、合并、添加等操作，使作品中的人物与实际人物之间存在很大不同，赋予了作品小说的性质，同时，也使读者在人物身上看到了作者中岛的影子。

通过对作品主题和创作方法的分析以及对作品内容和参考资料的比较，笔者认为，《光与风与梦》虽然并未完整地塑造出罗伯特　路易斯　斯蒂文森这个人物，但对于作者中岛来说，这并不重要，因为作者的目的并不是全面地谱写人物传记，而是选择适当素材将人物特点单纯化，鲜明化，从而赋予作品小说的性格。作者自身也通过这样的方法，使人物与自身融合，找到了适合自己的文学之路，为以后的创作奠定了基础。

キーワード……南洋　内面的独白　人物と作者の融合

はじめに

中島敦の「光と風と夢」は冒険談『宝島』、猟奇的な『ジーキル博士とハイド氏』などの作品に代表される作家ロバート・ルイス・スティヴンスン(Robert Louis Stevenson、一八五〇―九四)のサモア島における晩年生活を描いた作品である。作品の中で、病気に苦しみながら南海の自然を愛し、そこに住む現地人たちを愛し、白人たちの植民地政策に憤慨し、さらに文学に対して強い執着を持つスティヴンスンが描かれている。昭和十七年上半期の芥川賞の候補作としてこの作品は推薦された（1）。

これまで、作品の創作にあたって、中島がスティヴンスンの書簡集 *Vailima Letters*（2）を中心素材として利用したことはすでに何人かの研究者によって確認されている（3）。特に岩田一男は作品の内容を *Vailima Letters* の膨大な資料と比較し、作品の中の一節一節が何を引用・利用したかはかなりのところまで明らかにされてきた。

本稿では、これまでの先行研究を踏まえながら、作品の創作背景、作品の形式的構成と内容的構成を中心に分析し、構成によって作品にはどのような性格がもたらされたのかを考察する。さらに、この作品が作者中島敦にとってどのように位置するのかをも

考えてみたい。

まずは、作品の創作背景と形式的構成について考察する。

一　作品の創作背景と形式的構成

スティヴンスンはスコットランドのエジンバラで灯台技師の息子として生まれ、幼い頃から、病弱で、大学卒業後は、肺患のため、ヨーロッパ、アメリカや南洋諸島などを転地旅行し、一八八九年十二月サモア島に着き、ここに住むことを決めた。エキゾチックな環境の中に現地人と一緒に開墾農耕の生活を楽しみ、彼らを心から愛し、白人の現地人政策に憤りをもやして彼らのために奔走したり、喀血に苦しみながら創作を続けていた。一八九四年十二月三日世を去るまで彼は旅行以外にサモアを離れたことがなかった。

このようなスティヴンスンに、植民地経験と喘息の持病を持つ中島は早い時期から深い親近感と共鳴を感じたのである。本章では、「光と風と夢」の創作背景と利用文献などを分析し、作品の構成を明らかにしたい。

1　作品の創作背景

中島敦のスティヴンスンに対する興味は、初期の創作メモと思われる横浜高等女学校教師時代のノートに、「アナトオル・フランスとスティヴンスンしか読まぬ、それも、本格的な小説ではなく、随筆とか、幼時の憶出を書いたとかいつた種類の物に限る」（4）という部分があるから、非常に早い時期からのものであったことが分る。そして、「本格的な小説」より「随筆」などを好んで読んでいたことから、本格の創作作品よりスティヴンスンの人間性への関心が高いことがうかがえる。その理由としては、中島がスティヴンスンと同じ、肺病を患っていたこと、植民地経験や文学志望を持っていたことなどが挙げられる。

実際、中島の作品にスティヴンスンが登場するのは「光と風と夢」だけではなく、中島が昭和八年から十一年にかけて書いた未完成の長篇小説「北方行」に次のような一節がある。

> この半年程の間、彼は彼が今迄何年かかつて自分の中に造り上げ、書き上げた様々の芸術家達の肖像をあるひは打毀し、あるひは壁から取外すことに努めてゐた。ボオドレエル、アナトオル・フランス、ウォルタアー・ペエタア、エドガア・ポオ、オスカア・ワイルド、スティヴンスン、リスト、レオパルディ、三造は彼等を棄てようとした。（もしくは彼等が三造をすてようとした）（5）
>
> （傍線は引用者による）

さらに、昭和十二年に作った和歌集「遍歴」では、「ある時はスティヴンスンが美しき夢に分け入り酔ひしれしこと」（6）との一首がある。

もともと「光と風と夢」は「ツシタラの死――五河荘日記抄――

―」（7）という題名であった。雑誌「文学界」に発表するにあたって、雑誌社側は時局を鑑み、「死」という言葉が縁起がよくないからといって、中島に改題を求めた。また編集者の河上徹太郎は長すぎるから、サモア島の行動的な事件だけをルポルタージュ風に残し、主人公スティヴンスンの自己反省的独語を削るように希望したので、作者本人の手によって改題と短縮が行われた。その結果、作品は「光と風と夢――五河荘日記抄――」に改題され、内容も原稿の第十章～第十五章が集中的にカットもしくは変更され、昭和十七年五月の「文学界」に発表された（8）。短縮によって、原稿の第十章～第十五章が「文学界」掲載時の第十章と第十一章を構成し、原稿の二十章に対して、「文学界」掲載時は十六章となり、カットされた分量も全体の約一割に達していた（9）。のち、単行本『光と風と夢』に収録される際、「文学界」掲載時にカットした部分をすべて原稿に従って復元し、副題の「五河荘日記抄」が削られた。

2　中島敦が使用したと思われる資料

中島がこの作品を創作するにあたって、主要資料として使ったのは、*Vailima Letters* であったことはすでに岩田一男などの研究によって、明らかになっている（10）。

さらに、『中島敦文庫目録』（11）によると、中島家に残されているスティヴンスンに関連する書籍として、前記の *Vailima Letters*（Collins' Pocket Classics）の外に、以下の五冊がある。

○ *The Merry Men & Other Tales* (Tusitala Edition Vol.Ⅲ)
○ *Memories and Portraits* (Collins' Clear-type Press)
○ *Virginibus Puerisque & Familiar Studies of Men & Books* (Everyman's Library)
○ *Strange Case of Dr.Jekyll and Mr.Hyde,Fables,Other Stories* (South Seas Edition)
○ *R.L.Stevenson* (by Janet Adam Smith)

そのほか、書簡などから推測すると、以下のものも使用されたと思われる（12）。

○ *Poems* Ⅰ,Ⅱ（Tusitala Edition）
○ *In the South Seas*（Tusitala Edition）
○ *Vailima Papers*
○ 相良次郎『スティーヴンスン』（研究社評伝叢書）

これらの文献の使用もまた、前記の初期創作メモに残された中島の言葉、すなわち、小説より随筆などを好むことを示していると言えよう。

3　作品の形式的構造

「光と風と夢」は二十の章から成り、詳しく見てみると、以下のような構成である。

第一章　伝記的説明　全集(以下同)一〇五頁～一〇七頁
第二章　日記(一八九〇年十二月③)　一〇七頁～一一四頁

第三章　伝記的説明　一一四頁～一一六頁
第四章　日記(一八九一年五月⑤、六月②)　一一七頁～一二四頁
第五章　伝記的説明　一二四頁～一三一頁
第六章　日記(一八九一年九月②、十月①、十一月②、十二月①)　一三一頁～一三七頁
第七章　伝記的説明　一三七頁～一四二頁
第八章　日記(一八九二年四月③、五月④、六月②、七月①、八月①、九月②、十月①)　一四二頁～一五五頁
第九章　伝記的説明　一五五頁～一五八頁
第十章　日記(一八九二年十一月①、十二月①、一九八三年一月②、二月①、四月①、五月②、六月②)　一五八頁～一六七頁
第十一章　伝記的説明　一六七頁～一七〇頁
第十二章　日記(一八九三年六月二十四日、二十七日、三十日、七月四日、八日、九日、十日、十二日、十三日、十七日)　一七一頁～一七七頁
第十三章　伝記的説明　一七七頁～一七九頁
第十四章　日記(一八九三年十一月③、十二月②)　一七九頁～一八四頁
第十五章　伝記的説明　一八四頁～一八五頁
第十六章　日記(一八九四年二月①、三月①、五月①、七月①、八月②)　一八五頁～一九五頁
第十七章　日記(一八九四年九月②)　一九五頁～一九七頁
第十八章　伝記的説明　一九八頁～二〇一頁
第十九章　日記(一八九四年十月③、十一月⑥、十二月一日)　二〇一頁～二一五頁
第二十章　伝記的説明　二一五頁～二一六頁

(〇の中の数字は日記篇数である)

明らかに、作品は伝記的な説明と日記とが交互に繰り返される構成をもっている。文字数が相対的に多いのは、第十章、第十六章、第十九章である。うち、最も多いのはクライマックスの第十九章である。

また、原典の *Vailima Letters* は題名通り、スティヴンスンが友人のシドニー・ゴルヴィン宛ての手紙であるのに対し、「光と風と夢」はそれが日記に変更されている。

さらに、両者の内容を比較してみれば分かることであるが、原典の日付と無関係に原典の内容を日記の記述に用いる箇所は随所に見られる。それに、原典に何年にもわたって散見する記述を作者が特定の章に集中させて用いている(13)。このような意図的な修正と取捨選択によって、中島敦の描いたスティヴンスンは実在のスティヴンスンとずれが生じ、その結果、「光と風と夢」は決してスティヴンスンの単純な伝記ではないことも必然であろう。小説としての性質、そして中島敦の独特な世界が現れているはずである。

では、作品の内容はどのように選択、構成されているか、第二章で詳しく見てみよう。

二　作品の内容的構成と位置づけ

前記のように、「光と風と夢」は二十の章からなり、伝記的な説明と日記とが交互に配置される構成をもっている。物語りはスティヴンスンの晩年の「ひどい喀血」によって幕を開け、彼の一八九〇年から一八九四年までのサモアでの四年間を描き、四年後の死で幕を閉じる。本章では、この作品に描かれている主人公の日常生活、サモア紛争、主人公の内面的独白や文学観など、作品の内容的構成要素を中心に分析するとともにに、この作品の中島作品における位置づけをも考えてみたい。

1　作品の内容的構成

物語りはスティヴンスンが「ひどい喀血」に見舞われ、健康地を求めてサモアにたどり着いた頃から始まる。その地で彼は健康を回復し、現地人と一緒に純粋な喜びに溢れる開墾農耕の生活を始める。第一章最後の部分では、スティヴンスンは「太陽と大地と生物とを愛し、富を軽蔑し、乞ふものには與え、白人文明を以て一の大偏見と見做し、教育なき・力溢れる人々と共に濶歩し、明るい風と光との中で、勞働に汗ばんだ皮膚の下に血液の循環を快く感じ、人に嗤はれまいとの懸念を忘れて、眞に思ふ事のみを言ひ、眞に欲する事のみを行ふ」（14）との信条を述べ、新しい生活への憧れと期待に満ちる。

そして、第二章から第四章の中で、サモアの美しい自然が集中的に描かれている。スティヴンスンは色鮮やかな植物、泳げる豚など、野性的な動物たちに珍しさを感じる。これらの描写は中島が原典の *Vailima Letters* に散見するサモアの自然を取捨選択し、殆ど日付と無関係に用いたものである。このような集中的な描写はスティヴンスンのサモアの自然と新しい環境に対する愛情と興味を表している。

さらに、スティヴンスンはサモア紛争の歴史を触れ、純朴なサモア人の行動に不思議さを感じながら、彼らを心から愛し、白人の現地人政策に純粋な人道主義的憤りをもやし、彼らのために積極的に奔走する。それと同時に、スティヴンスンは多彩な創作活動をも続ける。

このように、作品の前半は南洋生活の明るさ、楽しさ、及びスティヴンスンが積極的に日常生活、文学創作、サモア人の権力と利益のための活動に取り組む姿が描かれている。

それに対して、作品の後半では、物語りが暗い方向へ向かっていく。第十二章の中で、サモア情勢が緊迫し、ついに戦争が始まり、スティヴンスンと親しいサモア人たちは次々に投獄され、流刑となる。スティヴンスンはおのれの無力を深く感じ、自己を強く責めとがめる。健康も再び悪化し、文学創作の行き詰まりに陥る。これらの要素をきっかけに、彼は内面的にも自己との長い闘

いを始める。それを経てスティヴンスンは再び生への自信を取り戻し、心が喜びと希望に満ち溢れ、新生を予感するが、この時に死が訪れてくる。

以上で分かるように、中島はこの作品の内容を明るい方向から暗い方向へと向かわせ、クライマックスではその暗さが一転するが、主人公に死が訪れ、物語りが終わる。「光と風と夢」では、スティヴンスンの人物像が全面的に描かれていないことをこの作品の不十分な点として指摘する意見があるが、それは作者の目的と作品の性質を無視した意見と言わねばならない。なぜかというと、中島は全面的にスティヴンスンを表現する伝記的な作品を描くのではなく、原典の内容を取捨選択し、サモア情勢という大きな歴史環境を軸に、主人公の日常生活の描写と内面的独白をうまく融合させ、作品に小説の性質を与え、一人の作家がサモアで生き、悩み、闘い、死に至る過程をすきなく構成している。

さらに、作品の中で、文学観と文学創作に対する困惑と熱意、知識人の宿命に対する認識などの面において、中島が自己と人物を融合し、スティヴンスンを自分色に染めた部分もある。次の節で詳しく見てみよう。

2　人物と作者の融合と作品の位置づけ

作品前半の日記風の部分はスティヴンスンの原文に依拠する度合が強いが、後半の部分から中島自身の色彩が次第に濃厚になってくる。つまり、中島はスティヴンスンに託して自らの考え方を語るようになってくる。

作品中においてスティヴンスンの文学に対する態度と文学観に関してたくさんの文字が使われている。例えば、第九章において以下の表現がある。

> 満十五歳以後、書くことが彼の生活の中心であつた。自分は作家となるべく生まれついてゐる、といふ信念は、何時、又、何処から生じたものか、自分でも解らなかつたが、兎に角十五六歳頃になると、既に、それ以外の職業に従つてゐる将来の自分を想像して見ることが不可能な迄になつてゐた。

その作家として生きようとする強い願望の跡を、続いて第九章の中に見ることができる。

> 死の冷たい手が彼をとらへる前に、どれだけの美しい「空想と言葉との織物」を織成すことが出来るか？之は大変豪奢な賭のやうに思はれた。出発時間の迫つた旅人の様な気持に追立てられて、彼はひたすらに書いた（15）。

「出発時間の迫った旅人」に喩えられたスティヴンスンが、「限られた生」の中で、精一杯に生きようとする表現として、「空想と言葉との織物」に喩えられた文学作品を一生懸命に創作する。

伝記的な資料からも分るように、実在のスティヴンスンにとっ

ても、やはり書くことこそが唯一の救いであり、それには常にたゆまぬ努力が払われていた。この章の最後に、スティヴンスンは「執拗な咳と喘鳴と、関節の疼痛と、喀血と、疲労と」の中で、自分の「生を引延ばすべき理由が何処にあるのか」を問い詰め、そして、結論を出した。「病気が行為への希求を絶つて以来、人生とは、私にとって、文学でしかなくなった。文学を創ること。それは、歓びでもなく苦しみでもなく、それは、それとより言ひやうのないものである」。このようなスティヴンスンの一途な文章修業の姿は、中島の羨望の対象であり、中島の目標でもあったろう。

さらに、後半の第十六章の一八九四年五月の日記で、スティヴンスンは、性格描写と心理描写、写実主義、作品の「筋」などについて自分の考え方を述べている。この部分は作者中島敦本人の文学観でもあると考えられる。

「何の為に、こんなに、ごた〳〵と性格説明や心理説明をやって見せるのだ。生活や心理は、表面に現れた行動によってのみ描くべきではないか？（中略）楽屋裏迄見通しの舞台のやうな、足場を取拂はない建物のやうな、そんな作品は真平だ。精巧な機械程、一見して単純に見えるものではないか」。

「ゾラ先生の煩瑣なる写実主義、西欧の文壇に横行すと聞く。目にうつる事物を細大漏らさず列記して、以って、自然の真實を写し得たりとなすとか。その陋や、哂ふべし。文学とは選択だ。作家の眼とは、選択する眼だ。（中略）現実は革、作品は靴。靴は革より成ると雖も、しかも単なる革ではないのだ」。

「読者を納得させるのがリアリズム。読者を魅するのがロマンティズム。」（16）

このステイヴンスンの文学観と文学創作に対する困惑と熱意は作者自身のものでもあろう。作品「北方行」の中でも、冒頭部分に中島の分身とも言える三造は「自分は作家となるやうに生まれついてゐる」と考えている。スティヴンスンの文学に対する情熱はまさに中島本人の文学創作において目指している目標であろう。

さらに、知識人の宿命に対する認識も作者自身の考えが現れている。十四章一八九三年十一月×日の日記には次のような一節が書かれている。

私は、自分が今、知的生活を送る人間に通有の、一つの転換期にあるのだといふ事を知つてゐるが故に、絶望はしない。しかし、私が、私の文学の行詰りにぶつかつてゐるのは事実だ。（中略）若い時に、何故、着実平凡な商売を選ばなかつたかと、今、ふと、そんな気がする。そういふ商売にはひつてゐたら、今の様なスランプの時にも、立派に自分を支へて行けたらうに（17）。

このような心理描写はまだ続くが、この部分は *Vailima Letters* 一八九四年十一月六日の日記を依拠したものである。スティヴンスンの手紙をもとに書いたのであるが、ただ単にスティヴンスンの心境を語っているとは思えない。それは「北方行」や「かめれ

おん日記」や「狼疾記」などの私小説風の作品を創作しながらも発表の機会もない中島自身の心境でもあると言えよう。中島の分身とも言うべき「存在への疑惑、存在の不確かさ」に対する形而上学的不安を持つ主人公たちが登場する作品しか書けない自身の文学の行き詰りを感じていた中島自身の強い苦しみであろう。

文字数が最も多く、作品のクライマックスである第十九章では、スティヴンスンは「肺臓麻痺を伴う脳溢血」で生涯を閉じる二日前の雨上がりの未明に、広い海と空を眺めながら、丘に立つ。

「湿気を含んだ烈風がまともに吹付ける。大王椰子の幹に身を支へ、辛うじて私は立つてゐた。何かしら或る不安と期待のやうなものが心の隅に湧いて来るのを感じながら。

昨夜も私は長いことベランダに出て、荒い風と、それに交る雨粒とに身をさらしてゐた。今朝も斯うやつて強い風に逆らつて立つてゐる。何か烈しいもの、凶暴なもの、嵐のやうなものに、ぐつとぶつかつて行きたいのだ。さうすることによつて、自分を一つの制限の中に閉じ込めてゐる殻を叩きつぶしたいのだ。何といふ快さだらう！四大の峻烈な意思に逆らつて、雲と水と丘との間に屹然と獨り目覚めてあることは！」

そして、夜が明けていくにつれて、彼の心は「生活の残渣や挾雑物を掃きだして呉れる何かが起るに違ひないといふ欣ばしい豫感」に、心は膨れていた。一時間後に、予感は現実になり、「眼下の世界が一瞬にして相貌を変じた。色無き世界が忽ちにして、溢れるばかりの色彩に輝き出した。（中略）今迄の灰色の世界は、今や濡れ光るサフラン色、硫黄色、薔薇色、丁子色、朱色、土耳古玉色、オレンヂ色、群青、菫色――凡て、繻子の光澤を帯びた、其等の目も眩む色彩に染上げられた」。この色鮮やかで不思議な光景が描かれた後、「一瞬の奇蹟を眼下に見ながら、私は、今こそ、私の中なる夜が遠く遁逃し去るのを快く感じてゐた。昂然として、私は家に帰った。」これによって、この場面は終わる。

未明から太陽が昇るまでの間のこの場面は単なる夜明けの光景を描いたものではない。スティヴンスンの一つの精神的な体験を表したものである。中島はかなり意識的にこの場面を描いていると考えられる。スティヴンスンの晩年の「ひどい喀血」によって幕を開け、四年後の死で、幕を閉じるこの作品は、一人の人間が、宿痾によって限られた生をどのように生き、死んでいったかという問題意識に貫かれていると言える。つまり、スティヴンスンは自分の生き方について追求し続けたのである。死の直前にこの場面が配されたのも、この体験が主人公の生き方に対する追求と繋がっていることを語るためであろう。

この丘の上の場面は、未完成の長篇「北方行」の一部を下敷きに用いていると考えられる。

「昨夜も彼は長いこと、甲板に出て荒い潮風と飛沫とに身をさらしてゐた。今朝もかうして強い風にさからつて立つてゐる。何かはげしいもの、強いもの、凶暴なもの、嵐のやうなものに、彼はぐつとぶつかつて行きたいのである。さうすることによつて、自分の身にくつついて、自分を不具者にしてゐる殻を叩きつぶし

たいのである。渤海湾は浅いので、少し風が吹くと、すぐに浪が立つ。船はかなり揺れる。船の動揺と、湿気を含んだ烈風と、しぶきと、灰色に広がつた曇り日の空と水の粛殺たる風景との間に立つて、彼は、今こそ自分の古いセンティメントの残渣が遠く遁逃し去るのを、快く感じてゐた。」（18）

この部分は、「北方行」の冒頭に近いところで出てくる。この後も、心理描写は長く続き、主人公三造は快感から一転する。三造は、「自分を不具者にしてゐる殻」、いわゆる自分と現実との間に張られている「寒天質」のような「薄い膜」のせいで、彼にとって現実とは今自分が触れているものではなく、自分の行為はすべて自分の影に過ぎないと感じた。引用の部分は、主人公三造の心象風景を描いた幾多の場面の一つに過ぎなく、「光と風と夢」のようにクライマックスで出てくるほどの重要性を持っていない。

「自分を不具者にしてゐる殻」を叩きつぶして、「薄い膜」を突き破って、生きる本能をもって純粋に生きることが、主人公三造の願いであったが、結局、「北方行」は未完成に終わり、主人公のこの純粋な生き方への夢も実現できなかった。それは「光と風と夢」の主人公スティヴンスンに引き継がれたと見ることができるのではないであろうか。

主人公が亡くなる直前にこの場面を用い、未明から太陽が昇るまでの間に、スティヴンスンの精神的な変化が描かれている。そして、最後にスティヴンスンは彼の心の中の「中なる夜が遠く遁逃し去るのを快く感じてゐた」だけではなく、「昂然として」、家に帰ったのである。辞書の解釈によると、「昂然」の意味は、自負があって意気のあがるさまである。つまり、「北方行」の三造が実現できなかった「自分を不具者にしてゐる殻」を叩きつぶして、「薄い膜」を突き破る夢を、スティヴンスンは死の直前に現実のものとして体験できたことを示していると言えるのではないか。スティヴンスンと三造が追求し続けたこの生き方は、作者の中島本人が追求し続けていたものでもある。

中島敦の描いたスティヴンスン、すなわち死に直面しながら、南洋の自然を愛し、現地人を愛し、また文学に全力を尽くすその姿は、実際のスティヴンスンの大きな特色を捉えていると思われる。作者が意識的に内容を取捨選択し、文学観と文学創作に対する困惑と熱意、知識人の宿命に対する認識などの面において、中島が自己と人物を融合し、スティヴンスンの口を借りて自己の考え方を訴えた。

終わりに

中島敦が南洋に赴任してから、たか夫人にあてた昭和十六年十月一日付の書簡には、「僕は今迄の島でヤルートが一番好きだ。一番開けてゐないで、スティヴンスンの南洋に近いからだ」（19）と記されていることからも明らかなように、もともと中島には、かつて自分が「光と風と夢」の中で描いたスティヴンスンの南洋行を強く意識し、スティヴンスンが経験した南洋に出会うことを心

から望んでいた。

中島は、死に脅かされながら、なお生きようとしたスティヴンスンの姿を、南洋の自然、そして現地人、さらに文学に対する真の愛情という形で描いた。それは実際のスティヴンスンの一面を強調したもので、実在のスティヴンスン像ではない。しかし、中島は一人の文学者が激動する社会情勢の中でいかに生きようとする姿を描くことによって自ら一つの成長を遂げたといってよいであろう。すなわち、自己意識に捉われ、虚無的知識人であった中島がスティヴンスンの姿を借りてはじめて認識の「薄い膜」を突き破ることができ、新しい意志に目覚めたのである。結局、「光と風と夢」はスティヴンスンの死によって幕を閉じたが、この人物の死によって中島は始めて作家としての生が得られたと言えよう。スティヴンスンという人間に出会ったからこそ、その後の中島の辞職、南洋赴任、作家として生きていく決意、様々な時間と空間を場面とする多彩な作品の誕生があったと言っても過言ではないであろう。

尚、中島敦の引用テキストは筑摩書房版『中島敦全集』、第一巻（二〇〇一年十月十日）、第二巻（二〇〇一年一二月二十日）、第三巻（二〇〇二年二月二十日）に拠った。内容に影響を及ばさないルビ、傍点は省略した。

〈注〉

（1）石塚友二の「松風」と共に最後まで賞を争ったが、「該当作無し」との決定で受賞には至らなかった。

（2）*Vailima Letters* はスティヴンスンが、サモア島の気候、風習、動・植物の生態、米・英・独の植民地政策に耐えながら生活する現地人への同情と白人たちの非人道性への怒り、自らの生活面と創作活動などを友人であり、編集者のゴルヴィンに宛てた書簡集である。

（3）岩田一男　「『光と風と夢』と *Vailima Letters*」　「一橋大学研究年報　人文科学研究」一九五九年五月、田鍋幸信　「『光と風と夢』におけるスティヴンスン」　「芸術学」一九六四年十月、鏡味国彦「中島敦とロバート・ルイス・スティヴンスン」　「立正大学文学部論叢」一九七九年十二月などが代表的である。

（4）『中島敦全集』（以下省略して、『全集』とする）第三巻　二三三頁

（5）『全集』第二巻　一〇八頁

（6）『全集』第二巻　二六五頁

（7）「ツシタラ」とはサモアの言葉で「物語りを語る人」の意味であり、現地人たちがスティヴンスンに奉った称呼であった。スティヴンスンが、土地の話にヒントを得て作った作品を現地人に話してきかせたところ彼らはその実在を信じて疑わなかった。副題の「五河荘」とはスティヴンスンのサモアにおける住居で、地名 Vailima（五つの河）から名付けたものである。

（8）「文学界」昭和十七年五月号(第九巻第五号、七十四頁～一五一頁、昭和十七年五月一日、文藝春秋社発行)に発表された。

（9）「光と風と夢(「文学界」掲載短縮部分)」として「十」「十一」の全文は全集第二巻(四九七頁～五〇五頁)に収録された。スティヴンスンの肉体的衰弱とそれがもたらす内面的な苦悩についての描写が大幅に短縮され、それによって、サモアの情勢が緊迫し、開戦から終結に至る事件の経過が整理されて事態の推移が明瞭になった。

（10）岩田一男　「『光と風と夢』と *Vailima Letters*」　「一橋大学研究年報　人文科学研究」一九五九年五月

（11）『中島敦文庫目録』日本大学法学部所蔵　一九八〇年十一月発行

（12）氷上英広より、昭和十五年九月七日消印で、「スチヴンソンのエヴリマンは学校に見あたらないが Tusitala Edition（William Heinemann, Ltd; London）がある。三十何巻だかあって complete works ぢやないかと思ふ。イン・ザ・サウス・シーズとポエムス二巻を借りてきたが、役に立つやうだつたら送る。綺麗な本で、バルフオアの評伝は

みつからない」とのような文面がある。『全集』別巻　四三一頁

（13）例えば、サモアの自然、スティヴンスンの文学観、サモア紛争などに関する記述は作者が特定の章に集中して描いている。

（14）『全集』第一巻　一〇七頁　この部分はスティヴンスンの「ホイットマン論」の中で引用された、ホイットマン『草の葉』の序文の一節を利用したものである。原文を省略する。（*Virginibus Puerisque & Familiar Studies of Men & Books*, Everyman's Library　一九五頁）

（15）『全集』第一巻　一五五頁～一五六頁

（16）『全集』第一巻　一八九頁～一九一頁

（17）『全集』第一巻　一七九頁～一八〇頁

（18）『全集』第二巻　一〇八頁～一〇九頁

（19）『全集』第三巻　六〇七頁

主指導教員（佐々木充教授）、副指導教員（高木裕教授・井村哲郎教授）